

「炎症性腸疾患 潰瘍性大腸炎と Crohn 病のすべて」

東京大学医学部教授・腫瘍外科 武藤徹一郎
福岡大学筑紫病院教授・消化器科 八尾 恒良
東京大学医学部助教授・腫瘍外科 名川 弘一
福岡大学筑紫病院講師・消化器科 櫻井 俊弘

編集

京都がん協会

多 田 正 大

最近、炎症性腸疾患 (inflammatory bowel disease; IBD) が目立って増加している。しかし早期発見・治療で完了する大腸腫瘍と異なり、IBD は鑑別診断も治療も一筋縄ではゆかない。免疫異常が発症と治癒遷延に関与していることは明らかであるが、どう治療に結び付けるかが難しく、臨床医を悩ますところである。系統的にまとめた指導書も少ない。

このような折、武藤徹一郎、八尾恒良教授ら、わが国の IBD 診療をリードする第一人者らによって編集された「炎症性腸疾患」が刊行された。IBD に関するすばらしい書籍が編集されているとの噂は耳にしていたが、久しく待たれていた大著である。

本書は厚生省特定疾患炎症性腸管障害調査研究班によって永年にわたって積み重ねられた研究成果を一冊の書籍にまとめたものである。お上の主導する単行本、と言えは編者から叱られるかもしれないが、善かれ悪しかれ、本書はわが国の IBD 診療のスタンダードである。実際、本書に記述された内容は、現時点で望みうる IBD に関するすべてが網羅されている。疫学から病因、病理、臨床像、治療がバランスよく配分され、まさに「平成の IBD 百科事典」である。

特に第 II 章「病因・免疫」は圧巻である。これほど簡潔明快に IBD の病因や免疫学的側面をまとめた書籍は見当たらないであろう。執筆者もこの方面の研究のパイオニアたちであり、多くの研究成果を公平に判定して記述している態度に好感が持てる。研修医にも理解できるように、心憎いばかりのイラストが駆使されているし、引用文献も豊富で、進歩の速いこの方面の最近の知見を検索するうえにも好都合である。すばらしい内容に感服しながら読破したが、この称讃の言葉は決して“褒め殺し”ではない。

第 VI 章「内科的治療」もスタンダードな治療から先進的なアラカルト治療まで、この方面のすべてが網羅されており、本書の核心を形成する。惜しむらくは、より具体的な薬物投与法を記載してほしかったが、本書の刊行の経緯から、厚生省で承認されていなかった治療法を記述することができなかったためであろうか？ 食事療法についても、更に具体的な記述があれば臨床医は助かる。

私は IBD の治療は全人的に行う必要があると痛感している。経過が長く再発頻度も高いだけに、患者は精神的にも参っていることが多い。それだけに薬物療法や栄養療法だけでは内科的治療がうまくゆくはずが

ない。IBD を心身症的立場から捉えた研究は散見されるが、多くの臨床医に理解されるまでには至っていない。本書でも柴田らによって数頁にわたって記載されているが、とてもこれだけのスペースでは IBD 患者の精神的サポートの重要性を語り尽すことはできない。

本書は IBD 百科事典を目標とした企画であるだけに、研究の進歩とともに次々と改訂、増補を加えて、息の長い指導書として後世まで語り継いでほしい。医学研究にはひとときわ厳しい編者であるから、本書の記述が劣っている箇所、内容が陳腐になっている所は既に気付いておられることであろう。いつの日にか改訂版を出版してほしいし、その際には、地味な臨床研究にも頁を割いてもらいたいと希望する。

いつまでも IBD の指導書として君臨するであろう大作、それだけに辛口の書評となったが、本書は IBD 診療にはなくてはならない書籍であるから、1 人でも多くの臨床医、研究者に熟読を希望する。

● B5 頁 320 図 90 写真 69
カラー写真 71 色図 1 表 95
1999 定価 (本体 13,000 円 + 税)
〒400

医学書院 刊 ☎ 03-3817-5657